連載随想第二十五回

心そこにあらざれば

白川渥

え・中西勝

今朝の新聞に、安楽イスのクッションの隙間から、七年前に紛失した財布を発見して、その落し主のアメリカ人に送り届けたと言う高校生の美談が出ていた。まったく、あの隙間と言うやつは、座った途端に口を開け、立った途端に口を閉じて器用に小物を挟み込んでしまう。いつぞや、私の家の客間のソファーの隙間からも、客のライターが出て来た。ライターには、そのアメリカ人の財布のように、身分証明書などはくっついていない誰のものやら、届けようもないままに、私が管理している。なかなかよく火のつくやつだ。落し主が現われるまで、私が愛用してやろうと思っている。

ところで、先日松山へ講演に行った時、てきめんにその報いを受けた。会場の公会堂の控室に着いて、大事な手帖を紛失したことに気がついたのだ。手帖には来月の予定はむろん、仕事の上の必要なメモや、この日の講演のタネみたいなものも書き込んである。私には財布以上に大切なものだ。途中、新聞社の社長室で昼食を頂戴している。その社長室か？　ここまで乗って来た車の中か？大急ぎで手配してもらったりしたが、そのいずれにもない。発見されたのは、講演もすんで、道後の宿に落着いてからだった。やはり、社長室のクッションの隙間だった。そのソファー、あまりにもデラックスだったので、深々と喰い込んでいたのだ。これは、ソファーは上等であればあるほど危険であると言う警め。……

さて、この旅行中、私は幾度もヘマを重ねた。第二回目は、その翌朝である。預けておいた貴重品袋をそのままにして、宿を出ようとしたのだ。宿賃は新聞社の払いだが、女中にチップぐらいはと、車に乗り込んで懐に手を突っ込んで、やっとそうと気がついた次第。係の女中もノンキだが、客の私もドウカしている。

第三のヘマは、新居浜市での講演中にやった。二時から三時半までの約束だったが、その一時間半の長かったこと。話のタネもつき果てて降壇してみると、何と四時半だった。私の時計が止まっていたのである。

第四の失態は、帰りの車中でのことだが、その前に、今度の旅行の目的について、ちょっと告白しておこう。お喋りは苦が手だが、敢てこの講演旅行を引受けたのは、松山や新居浜にゴルフ場があるからだった。松山にも、新居浜にも、知人のゴルファーがいる。彼らよりかねがねゴルフの誘いを受けている。伊予はわが郷里ながら、私はまだ一度もそこのコースをラウンドしたことはない。それに、久しぶりに墓参と言う大義名分もある。お喋りも、暑中の旅行も憶却だったが、ゴルフのために万難を排したわけだ。

ところが、出発の朝から天候が崩れてしまった。伊丹を立った飛行機は、今治上空にさしかかった頃から、吹きつける霧の中でひどく揺れはじめた。一挙に、百ヤード？　も落下する。やっと三十ヤードほど上昇したかと思うと、又百ヤード。……機体は激動しながら、濃霧の中で次第に地表に接近する。眼下は、来島海峡の渦汐か？　いや、高縄山脈の山嶽地帯かもしれない。いまにも地球に激突しそうで、私は蒼くなった。乗客の中には、もう手元のビニール袋を引き寄せて、ゲエゲエをはじめている者もいる。

ともかくも、無事に松山空港に着いたものの、これまでの空の旅で、こんなにド胆を抜かれたことはない。しかも、松山はゴルフどころか、ドシャ降りの荒天だった。

帰途を列車にしたのは、この往きの飛行機にコリゴリしたからだった。雨はまだ容赦なく降りつづいている。私は宇野発の特急列車で、食堂にはいった。三日ばかりの田舎旅で、コーヒーに飢えていたのだ。

ところで、そのコーヒー、いやに生ぬるい。ポットの残りを注いでよこしたにちがいない。家でも毎朝自分でつくって飲んでいる私には、この無神経な生ぬるさは我慢がならず、ボーイを呼んで文句を言った。

「相すみません。新らしいのと取りかえてまいります」

「いや、もういいよ。ビールをくれたまえ」

私は下戸である。ゴルフのあとでも、小瓶一本で真っ赤に染まる。その小瓶とエビフライを平げて、さて自席の近くまで引き返した時だった。

「モシ、モシ、お勘定を。……」

ボーイが、後から追いかけて来たのである。私はわが迂闊さに恐縮して、陳弁につとめたが、ボーイはビールに赭らんだ顔をのぞいて、てっきり食い逃げとにらんでいる。さっきのコーヒーの小言も、わざわいしたようだ。乗客の前で、カッコのわるいことおびただしい。

何としたことか、この度重なるヘマ！　さてはおれも年のせいで少しボケてきたか？　いや、すべて、往途の飛行機でキモを冷やしたために、そのショックで頭のネジがゆるんだにちがいない。

が、わが家に帰って家人に報告すると、

「ホホホ……ゴルフ馬鹿がゴルフの当てが、外れたからですわ」

と、山妻は言う。さもあらん。ゴルフの他に何の余念もなかったからであろう。

——これは、心そこにあらざればかくの如しという警め。……

（作家）

連載随想第十二回

白砂の記

阪本勝
え・小松益喜

五つか六つのころだったと思う。

母が病弱だったので、転地療養のため、父が浜寺の海岸に小さな家を借りた。松林のなかにぽつんと一軒建っている平家だった。なぜあのようなさびしいところに、一軒だけ建っていたのかわからないが、今から考えると、おそらく大阪あたりの金持ちがだれかの療養のために建てたものだったのだろう。そこに母と私と年とったばあやと三人が住むことになった。松風と潮騒の明け暮れが子供ごころにさびしかった。

尼崎の眼科医だった父は、ときどき訪ねてきた夏が近づいて私が海にはいりたいというと、どこで手に入れたのか、一本の棒杭と槌などをもって私を砂浜につれていった。父はそこに穴を掘り、棒杭を打ちこんだ。そして、綱の一端を棒杭に結び、他の端で私の体を結び、さあはいれ、といった。綱つきの小坊主は大喜びで海の方へ走っていったが、波打ちぎわで綱がぴんと張り、それからさきへはゆけなかった。うしろで父が大きな声で笑ったのをおぼえている。父の発明にかかる水難防止法であった。

母は毎朝、毎夕、私を渚につれていった。そして私を綱に結び、波の方へ放ってくれた。私は波打ちぎわで、ひく波を追いかけたり、くる波に追いかけられたり、仰むけに寝て体を波に洗わせたりして、たのしく遊んだ。

母は棒杭のそばに腰をおろして、私の方を見たり、空や海を眺めたりして、私がもう帰ろうというまで、じっとしていた。なにかしらさびしそうだった様子が今でも記憶に残っている。じじつ母はさびしかったのだろう。今から思うと、おそらく胸に軽微な障害があったのであろう。軽微とはいえ、人里はなれた海岸の一軒家に住む身となって、気の弱い母は人知れず泣いていたのであろう。母は一度も海にはいったことがない。ただ私のために、日傘さして白砂の上でしょんぼり番をしていてくれたのである。この光景を思い出すと感動で私の胸はいっぱいになる。

私たち母子は、よく波打ちぎわで貝ひろいをした。今の人には想像できないほど、そのころはいろいろの美しい貝が渚に落ちていた。名は知らないが、桃色や紫や紅色の貝など、とりどりに美しかった。母は物静かにそれを拾っては手籠に入れた。子は走りまわって拾ってきては、母の手籠にほりこんだ。渚に人影らしいものを見たことがない。いつも母と子ふたりだけだった。そのころの

浜寺の海岸はそれほど人気がなかったのである。砂浜は遠く続き、波打ちぎわの白い線で縁どられていた。

夜は松林のかなたの木かげに数点の灯が見えるばかり、あたりはまっくらな闇だった。わが家の夜の灯が電灯だったか、ランプだったか、よくおぼえていないが、おそらくランプだっただろう。雨風の夜はとくにさびしく、こわく、松風と波の音におびえながら寝た。

ある日の夕暮（だったと思う）母がめずらしく下駄をぬいで、波打ちぎわの砂の上を歩きだした私は黙ってそのあとについていった。そのときある奇妙なことに気がついて、子供ごころにびっくりした。その記憶が今でもまざまざと瞼の裏に残っている。裾をからげて歩いてゆく母の足の裏の白さに私は驚いたのである。波に洗われた砂の上を歩いてゆくのだから濡れていて、とくに白く見えたのか、それとも病弱な母の足の裏がふつうの人より白かったのか、それはわからないが、少年の眼を射るほどの白さだった。

後年私は〝きょうこのごろ〟と題する一文を草したが、そのなかにつぎのような一節がある。

「花らんまんと咲きにおう盛りの春に歌うよりうぐいすの声ようやく老いる晩春初夏のあわれが心をひく。峯に雲湧き、紺碧の海ひらける壮大な夏の魅力もすばらしいが、夏も衰え、海水浴場の人影もまばらになって、渚行く女の足の裏が白々と光るころの砂浜ほど、かそけく、せつないものがあるだろうか」

こういう私の感覚は、少年のころのあの日の記憶にむすびついているのである。あの日が夏であったか、秋であったか、おぼえていないが、今では秋であったと思いこんでいる。病弱の母―秋―白々と光る足の裏―かようにむすびつけて、美化された映像を私は胸に描いているのである。

母はあのころおそらく三十前後だっただろう。大阪天満の与力、大塩平八郎に焼かれた天満生れで、娘のころは天満小町といわれたそうだが、ほっそりとした美しい人だった。それでも柳に雪折れなしのたとえのとおり、菜餌に親しみながら、六十八の寿命をたもった。

そのながい生涯を通じ、かずかずのたのしい思い出があるが、何といっても、まだ小学校にあがるまえ、浜寺の松林のなかで暮したころの記憶がいちばん遙けくまたせつない。そしてまた甘い。母が目を閉じたとき、私はその遺体を抱いて自動車にはこんだ。

「ああ、軽い！」

私は心のなかでそうさけんだ。

ほんとうに、軽く、小さく、やさしく、弱い母だった。

その後私は、いくたびか白砂の浜辺に降り立って、浜寺の思い出にふけった。知事時代、淡路島に渡ったときなど、ときに車から降りて渚のあたりをうろつき、遠い昔をしのんだものである。

さて、この稿で〝神戸っ子〟さんに約束した十二回がおわることになる。何べん途中でかんべんしてもらおうと思ったかしれないが、編集子の熱意にほだされて、とうとうここまで続けてきた。ながらくつまらぬものをお読みくださった読者のみなさんにあつくお礼申しあげます。

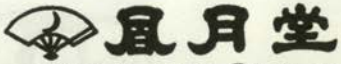
（随筆家）

呉服・洋装

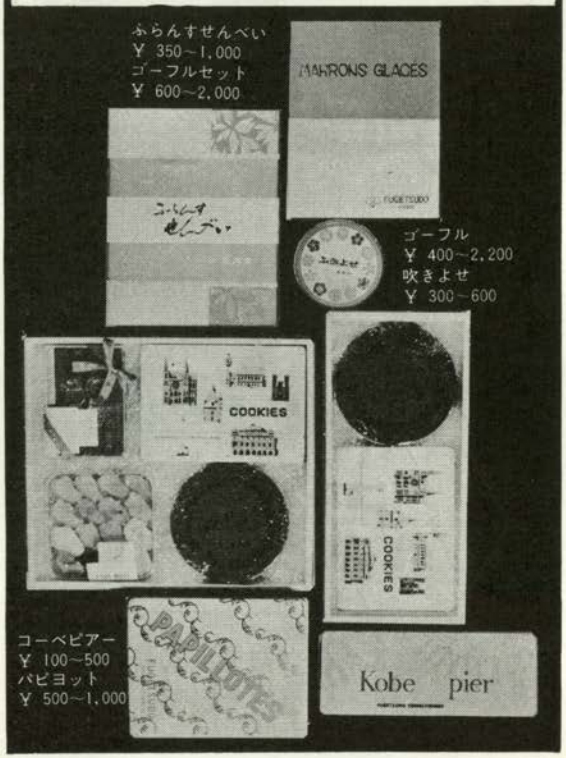
みよしや

神戸大丸前
電話神戸㉝三三八八～九番
大阪店阪神百貨店三階
電話大阪(361)五五四八番
姫路店やまとやしき百貨店三階
電話姫路㉓一二二一番
衣裳部　三宮町三丁目柳筋
電話㉝五一六五番

贈る喜び味覚の愉しみ



元町3丁目　TEL㊴2412～5



ダイハツ

これが日本の
《ファミリースポーツ》

現金正価 デラックス **578,000円**

（兵庫県店頭渡し） スタンダード **498,000円**

●お求めやすい〈ダイハツオートローン〉を実施しています

水冷4直 800cc 41馬力・最高速度 110キロ

5人乗りのファミリースポーツ

コンパーノ

ベルリーナ

デラックス

兵庫ダイハツ販売株式会社

本　　社　神戸市生田区加納町2丁目18　TEL神戸(22)4111(大代)
姫路営業所　姫路市別所町北宿字西段901　TEL姫　番477(代)
但馬営業所　城崎郡日高町竹字桜本222　TEL江　原526(代)

ウシオセフティベルトで
快適なドライブを
……つかれません
……安全です

ウシオ工業株式会社

本社　神戸市葺合区御幸通(興進ビル)　TEL 22－8891
支店　大阪 TEL 541－5885、東京 TEL 201－8829

□神戸っ子放談□

阪神港の大構想を

神戸を東洋の大中心地に

浅田長平　神戸製鋼所会長

「さあ、なんでも話しますよ。きょうは大いに放談しろということだからね。」こう言って、にこやかに記者を迎えて下さった浅田会長は、大実業家らしい風格のなかにも、なんとなく好々爺というような親しみやすさを感じさせる、おだやかなお人柄。

神戸の昔

「ぼくがはじめて神戸に来たのが明治44年だから、もう53年もの間神戸で暮してきたことになるネ。大学（京

写真は浅田会長

都帝国大学）を出て、すぐに神戸へ来たわけです。生れは堺なんだけれども、これだけ長く神戸に住みついてきた今となっては、はっきり〝神戸っ子〟を自認しても、ちっともおかしくないと思っていますよ。神戸は山あり海ありで、ほんとにいい所だネ。それに食べものにしたって、うまいものがいっぱいある。こんないい所は、他にはちょっとありませんよ。だいたいぼくは、生っ粋の関西人で、中学は堺、高校（三高）、大学は京都、それ以後は神戸というふうに、これまでずっと関西から離れたことはないんですよ。

それにしても、神戸も昔と比べると、ずいぶん変ったものだと思いますネ。神戸の昔の思い出というと、野球がなかなか盛んだったことを憶えているネ。神戸商業なんか、なかなか強いチームだった。明治末年のことだけれどもネ。それと、今の人はたぶん知らないかもしれないが、敏馬神社のあたりに、昔は遊廓があったんですよ。ぼくの友人でも、そういう所へ遊びに行く粋な連中もいて、なかには芸者を妻にめとったなんて人もいましたね。もっともぼくはそういう方面にはあんまり縁がなかった。こっちは早婚だったからね（笑）横道にそれるヒマがなかったわけだよ。またあのあたりの海岸は、海水浴場としても有名で、ずいぶん賑わっていたんだが、今ではその面影すらなくなってしまっているネ。完全な工業地帯に変ってしまったわけで、どうやら〝工業は風流を破壊する〟ものということになりそうだネ（笑）

その頃ぼくは岩屋に住んでいたんだが、三の宮へんまで歩いていったというようなことも、よくあったナ。活動を見に行ったり、寄席を聞きに行ったりしたもんだよ今の三ノ宮神社の前あたりには、たくさん活動屋があったし、生田神社の近くには寄席があったから、もっぱらそういう所へ通っては楽しんでいたわけです。そう、当時で活動の入場料は5銭ぐらいだったんじゃないかネ。なにしろ古い話ですよ、これは。」

趣味と私の健康法

「そんなわけで、ぼくは落語なんかずいぶん好きなんだよ。この頃でもテレビなどでよく聞くことがあるネ。

それと、ぼくは新内が得意でネ。これは太夫をもらっているくらいだから、自分としても自信のもてる趣味のひとつだと思っていますよ。他には清元や都々逸なんかもやるから、そうしてみると趣味にかんしては、古典派ということになりますかな。もっとも、ぼくの練習方法は、お師匠さん一辺倒ではないんで、主にレコードでやるんですよ。レコードのない場合は東京へ行ってお師匠さんから教わるわけだけどもネ。

それに新内にしろ、清元にしろ、それはぼくの欠かせぬ健康法でもあるんですよ。つまり、発声ということだネ。毎朝これを一時間くらいやる。もう何十年というもの、この習慣を続けているんだが、おかげで年はとってもすこぶる健康です。うたの方も自然に上達することになって、一石二鳥というわけですよ。もう一つは散歩だネ。これはどこにいてもできるし、朝の清々しい空気のなかで散歩するのは、ほんとに気持のいいものですよ。

他に趣味といえば、美術工芸品の蒐集と読書ですネ。インドやドイツの彫刻もあるし、村上華岳の絵などもだいぶ集めていますよ。読書としては、漱石、鷗外、荷風の小説なんか愛読していますネ。まあ、エンヂニアとしては、ぼくの趣味は多岐多端にわたっていて、自分でも恵まれていると思ってるんですがネ。」

これからの神戸

「ぼくが今後の神戸に望むことといえば、やはり港をどうするかという問題ですネ。ぜひ東洋の大中心地になってもらいたいとねがっていますよ。

では、そのためにはどうすればいいかということになるんだが。……ぼくの考えでは、だいたい大阪港と神戸港

が別々に存在しているということがよくないと思うネ。これはひとつにまとめるべきですよ。大阪港は小さいもんだし、将来性という点にはあまり期待をかけられないんじゃないか。やはり今後は大阪港と神戸港を合併してひとつの港に統一した方がいいでしょうネ。外国の港と比較してみればわかるんだが、ニューヨークの港などには百以上もの埠頭があるんだよ。これからはそのくらいの大規模な港を建設することを目標にすべきでしょうネ同時に、神戸、大阪、堺、西宮などの都市もひとつの都市に合併統合する、そういう方向に進んでいってほしいと思いますネ。もっとも、こういう理想論はなかなか実行できそうもないんだが、先ず大切なことは、現在の法科万能主義を改めることですよ。明治の昔に法学士の決めたことを、いつまでもそのままにしておくことはありませんネ。3府43県なんて取り決めだってその名残りだけども、今じゃ時代遅れだといわざるをえませんネ。時代に即した、頭の切り換えが必要でしょうな。」

経済戦争に備えて

「ぼくはネ、もう戦争は起らないだろうと思ってるんですよ。まあ、暴力団の小ぜりあい程度の局地戦争くらいは、あちこちで起るかもしれんがネ。しかし、世界大戦の可能性は、ほとんどないといっていいんじゃないかと思いますネ。これだけ核兵器が発達、完備してきた時代では、戦争は即ち人類の滅亡だということなんで、アメリカやソ連のトップクラスの連中は、それをちゃんと知ってるんですよ。ボタンひとつ押せば、モスクワもニューヨークもあったもんじゃない。共倒れは目に見えている。自分達の生存する見込みのない戦争なんか、だれもするはずがないわけですよ。

そこで、これからはいよいよ〝経済戦争〟の時代になりましょうネ。アメリカ、ソ連、中共をはじめ、現在の世界各国の国防費というものは莫大な額ですが、それが漸次減少してゆく傾向を予想するならば、あとは、経済戦争が本格化すると考える他はありませんネ。

それに東南アジアの未開発諸国も、ドンドン経済的に発展しつつあるわけですよ。こういう新興勢力のちからは、バカにならない。日本にとっても相当の脅威になりますネ。自由競争はむろん本格化してゆくし、今後の日本の経済界は、よほど心してかからないと、落後する恐れがあると思いますネ。特に中小企業については、そういう不安がつよいですよ。政府もいろいろ対策を考えてはいるようですが……。

ぼくは、今の日本は江戸時代の文化文政期のような時代に来てるんじゃないかと見てるんですよ。繁栄の絶頂期なんです。国民の暮しむきにしても、戦前のそれとは比べものにならないくらい豊かになっていますネ。だから、その反動がこわいと思いますよ。ぼくなんかは、もう老人で半分天国に足をつっこんでいるから（笑）かまわないけれども、後に続くもののことを考えると、いろいろ不安がありましてネ。日本は将来どうなるんだろうかなどと考えて。だから、今申上げたような時代の動向から言ってソ連のように徹底した能率主義を採用することを、考えるべき段階に来ていますネ。能力なきものは、社会施設で養なうようにして、学歴尊重や年功序列なんかは廃止すべきでしょう。それから、サイエンス（科学）を国民の一人一人が身につけることが必要ではないかと思いますネ。だいたい東洋人は〝算術〟に弱いですよ。孔子や釈迦などはむろん偉大な人物ですが、彼らの生みだした哲学や道義だけでは、アメリカや西洋、ソ連のちからにはとても対抗できませんよ。つまり科学に哲学は勝てないということです。〝算術〟教育に、いっそうの努力を払ってもらいたい、ぼくはそうねがっていますネ。」

（文責編集部）

経済ポケット ジャーナル

川崎製鉄、副社長制設ける

川崎製鉄が六月末に専務四人をいっせいに副社長に昇格させたが、専務時代からすでに代表権を持っていただけに同業他社では「なんのために副社長制を設けたのか」と不審がる向きが少くなかった。これについて社長の西山弥太郎氏は「会社の規模も大きくなったので、各副社長がかなりの部分まで自分の権限でどしどし仕事ができるようにしたわけだ。わたしも年をとったしそろそろ好きな釣りを楽しんだり、碁でも打ちたい」と事情を説明しているが、そういう口の下で「各社長がバリバリ仕事してくれれば、わたしも水島製鉄所（同社が岡山に建設中の新鋭製鉄所）の建設に取組める」とどうしてまだまだ釣りや碁打ちを楽しむ心境とは縁遠いようだ。

神鋼と尼鉄の合併決る

神戸製鋼所と尼崎製鉄との合併がいよいよ確定的になった。両社の合併は前々から話があったが、世銀と交渉のため渡米中の市川神鋼専務から神鋼本社に入った電報で分ったもの。電報によると①世銀は神鋼と尼鉄の合併を承認する②ただし尼鉄は合併前に資本金を百五十億円に増資しなければならない③合併後の新会社の財務比率は四十年九月まで負債比率の超過を認めるという内容。この結果、尼鉄は年内に半額増資し、明年四月一日付で両社の合併が正式に実現する。合併後は年間売り上げ高が約二千億円となり、大手鉄鋼六社中の六位から三―四位に順位が上がるものとみられる。なお曽我野尼鉄社長は合併後の本社業務は重点を東京に移すとの方針を持っていることを明らかにしている。

政府にハッパを かける砂野川重社長

川崎重工の砂野仁社長は神戸財界ではかなりの硬骨漢だ。自民党総裁選で池田首相が三選されたことについては「池田首相、佐藤栄作、藤山愛一郎各氏の誰がなってもあまり変わりばえしない。神戸としては明石架橋に理解を示している池田首相が三選されたのはいいことだが、政治家はもっと姿勢を正す必要がある。創価学会の政界への進出やゴールドウオーターの共和党大統領候補指名などは一服の清涼剤だ。こういう刺激がなくても改善するようにならなくてはいかん。ソ連のフルシチョフ首相などは欧米を見てだいぶん変わってきた。中共もきっとそうなる」と警世の言をはくことしきり。神戸製鋼の浅田長平会長も熱血漢だが、もっと若き憂国の士はいないものか。

☆　☆

神戸通船上で関西小壮経営者合同懇談会

神戸経済同友会は七月二十九日、大阪の同友会とともに関西小壮経営者合同懇談会を神戸通船上で開いた。別に先きに開いた瀬戸内船上会議にあやかったわけではないが、ウグイス嬢の説明を聞きながら「神戸港の現況と問題点」について若手経営者らしい活発な意見が続出した。この会議には地元神戸はじめ大阪などの若手経営者約七十名が参加したが、会議のあとも銀行倶楽部で懇親会を開くなどお互いの理解と友情を深め合った。また七月末には神戸商工会議所、神戸市と姫路商工会議所、姫路市が首脳陣勢ぞろいで姫路で神戸播磨経済会議を開き、神戸港の発展を話し合うなど、このところ神戸経済界は目を広く四方に開いて活発な活動ぶりをみせた。

＊KOBE オフィスレディ＊

梶　惇　子さん（21才）
竹馬産業KK勤務

星陵高校、欽松文化学園を出てO.Lになってやっと1年、会社の受付けで可愛いい笑顔を見せる神戸っ子である。趣味はテニスと手芸という健康的な明るいお嬢さん。

'64 *Autumn Shoes*

今秋はデリシャス・バーモリーを基調にしました

靴の専門店 **クロス**

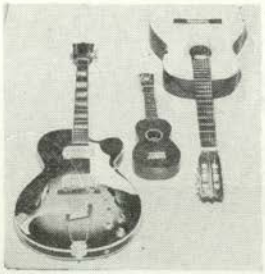
神戸 トア・ロード
TEL.㉝0998
代 表㊴1781

大阪 阪神百貨店
TEL.㊱1201

＊40年10月には三宮地下街に出店致します＊

KOBEヤマハニュース

サーフインセール 6月23日～8月末



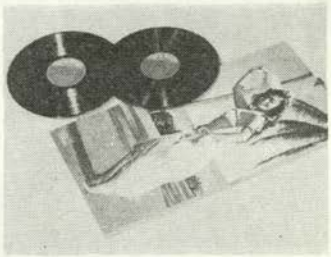
◆輸入弦楽器がいっぱい

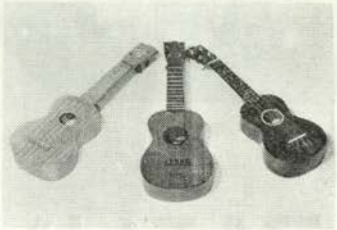
夏のレヂャーを楽しむ、海や山でのひとときに、ギターやウクレレはいかがでしょう。日本楽器ではハワイアンギター、エレキギター スチールギター、ウクレレなど輸入楽器を豊富にとりそろえています。

左KAY(株)電器ギター ¥85,000
中ヤマハウクレレ ¥4,800
右矢入のギター(ガット) ¥13,000

◆ハワイアンレコードで夏を楽しく！

夏はハワイアンレコードで楽しみましょう。写真は「ハワイアンのすべて」2枚セット¥3,600 30cmステレオ盤(ビクター)で、ハワイのムードが満喫できます。この他、輸入盤レコードのバーゲンセールを7月20日～8月20日まで行います。ぜひお求め下さい。





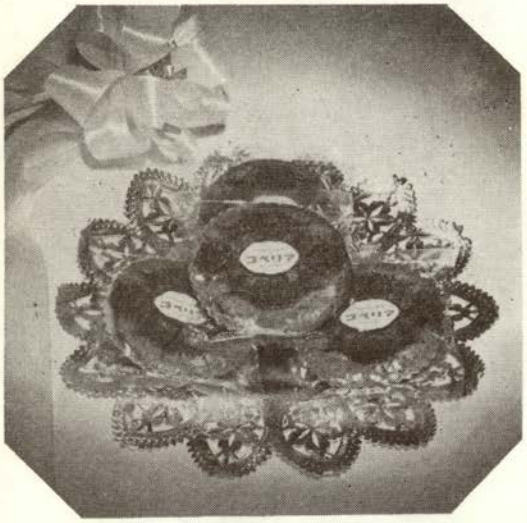
◆夏はウクレレで楽しく

ウクレレは手軽くたのしめる夏の楽器、若い人たちの楽器です。今年の夏こそ日本楽器の特選ウクレレをぜひおもとめください。

神戸もとまち
日本楽器
元町2丁目 TEL㊴3151代

くるみ割り人形から
生れたお菓子

COPPELIAS
コペリア



アルモンド

本　店　神戸市生田区元町通２の43
直売所　神戸大丸・新聞会館秀品店
本店ＴＥＬ㉝２２０３

きものと細貨

神戸
西店／TEL.㉝8836(代)
東店／TEL.㉝0629

東京
新橋店／TEL.(571)0807
銀座店／TEL.(572)5151(代)
小松ストア地階

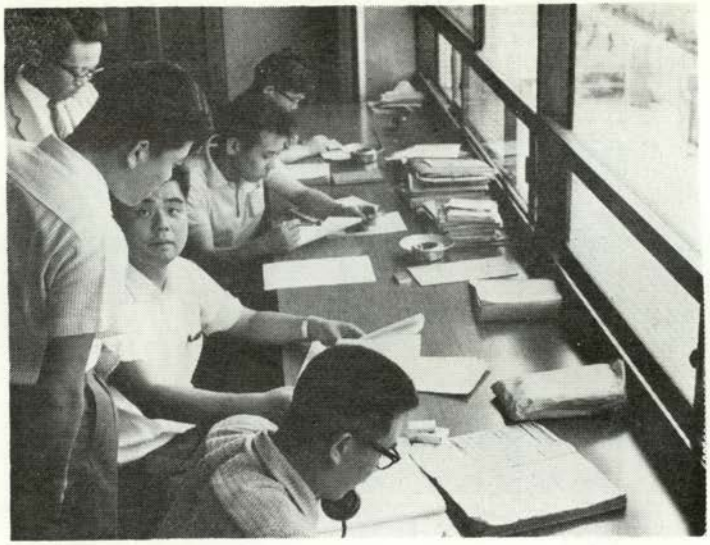
おんがら屋

るぽるたーじゅ・コウベ ①

神戸海運記者

松原新一

撮影・緒方しげを



港や海にまつわる記事が、ここで生れる

神戸と港。このふたつを切り離して考えることはできない。港を抜きにして、神戸の都市としての存在はありえないといっていいからである。神戸は、港とともに生れ、生きてきた。昔も今も、そしてこれからもまた。

港という特殊地帯をもち、またそれとの堅い結びつきをとうして生きている神戸の動態を、たえまなくみつめつづけている人々がある。《海運記者》と呼ばれる人々である。読者諸氏は、神戸港湾合同庁舎という建物をご存知だろうか。オリエンタルホテルのすぐ南側の建物だ。その3階に《海運記者クラブ》という一室がある。岸壁に水死体が浮ぶ。船が衝突する。ピストルや麻薬の密輸入事件がおこる。春の淡路沖をクジラが漫歩する。外国船員といざこざをおこした労務者が、船の上から海へ突き落とされる。例えばイギリスの観光船アイベリア号が神戸港に停泊する。etc. 私どもが、日々の新聞の中に見出す、海や港にまつわるこれらのさまざまの事件や事故は、他ならぬこの《海運記者クラブ》の人々のペンによって報道されているのである。

一見すれば、港はのどかで、平和な光景だ。だが、その実質をうわべだけで平和と片づけるわけにはいくまい。

少くとも、観光客を乗せた遊覧船のガイド嬢がつづる観光用美文からは、当然のことながら港の全貌をうかがい知ることはできぬのである。そこにはやはり、人間のいとなむ複雑なドラマが隠されている。そして、そのドラマの刻々の動きを、各社の海運記者達の目は、日夜たゆみなく追求しつづけているのである。

以下は、その海運記者の面々と行をともにした、一日の記録——。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

午前9時。クラブに顔を出す。船の歩廊のような妙に細長い室だ。窓際に一列の長い机がある。そこが海運記者の仕事場だ。スクラップブック、その他の資料、古新聞の山、原稿用紙やエンピツが雑然と並んでいる。それに、飲みかけの湯飲み茶碗が三つ。床には書きくずしの原稿用紙が散乱している。濃緑色のソファが置かれている。だが、本当はソファなどといえるしろものではない。クッションは、完全に効果を失っているから、腰をおろせば板の上にすわっているのと同じ心地がする。紙クズに埋ったそのソファに二人の記者が寝ころんでいる。自動車の騒音が、ひっきりなしに伝わってくる。海岸通りに面したこの室は、およそ静寂とは無縁。朝寝をむさぼる記者のほかには、雑務係のお嬢さんがいるだけで、他の記者連はまだ顔をみせていない。

「ああ、眠い眠い」目をこすりながら、A社のX氏がふいと顔をあげた。

「ゆうべは泊りでね。〝めざまし電話〟でおこされたものだから眠くてしょうがない。社でチャーターしてるタクシー会社からかかってきたんだが、それが朝の7時すぎなんだよ。いつもならまだお寝んねの時間だよな。まあ商売だからしょうがない〝これから車を出しますよ〟〝ハイヨ〟てなわけでね。水を顔に流して、宿直室のゆかたで顔をふく。こいつは、女友だちには見せられないサマだったな」X氏は苦笑をうかべる。三菱重工神戸造船所の第3船台で進水式があったのだという。「さっきその原稿を送ったばかりでね。ちょっとひと休みしていたところ。だいたい新聞記者には、いつでも簡単に居眠りできる訓練が必要なんでね。もっともかけ出し記者には無理かもしれんがね」——X氏、自分のベテランぶりを暗に自画自賛しているわけか。「といって怠けていると思われちゃ困る。これでもひと寝入りする前に、ちゃんと5管（第5管区海上保安本部）保安部（神戸海上保安部）水上署を回り、税関、麻薬（近畿地区麻薬取締官事務所神戸分室）には電話で警戒ずみだ」X氏は、ひとしきり、その抜けめのない仕事ぶりを披露する。横で依然として居眠りするB社のY氏を指して「やっこさんとも、さっき向うで一緒になったんだが、二日酔いでね。足がフラフラするなんてぼやいていたよ」そういってX氏、ワッハッハと豪快に笑った。

9時半。各社の記者も、そろそろ勢ぞろい。彼らの一日の活動が、やがて本格的に始まる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

〝四百トンくらいの船が紀淡海狭で炎上〟——和歌山県から第5管区海上保安部に電報入電という情報がはいる。それまで、ムダ話に花を咲かせていた記者達の顔が一瞬緊張した表情に変る。たれもが電話にしがみつく。支局へ第一報を送るためだ「どないしょか。よっしゃ。じゃあ、すぐに飛ばして下さい」これは、C社のZ氏の声。たぶん飛行機を現場に飛ばすべきかどうかをデスクに相談したものだろう。20分経過。詳細な情報がはいってくる。沼島沖で貨物船が炎上。硫黄六百トンを積んで航行中の事故だという。誰かが「危ないな」とつぶやく。ふとみると、D社のS氏がふたたび電話に走った。どうやらここはまだ飛行機を飛ばしていなかったらしい。

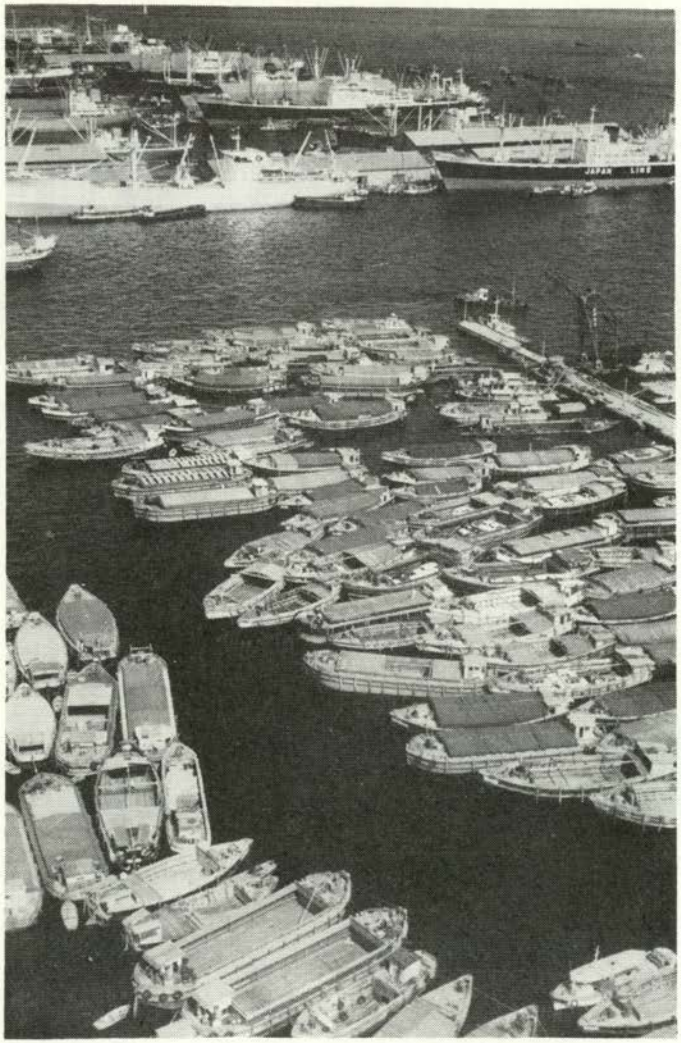
10時。さっき税関方面へ出かけたC社のH氏と、E社のK氏がなかなか戻ってこない。なにかあったんじゃないかと気になる。案のじょう、A社のF氏、吸いかけのタバコをもみ消すと、ゆっくりとした足取りでクラブを

出て行った。海岸通りに飛び出したF氏が、タクシーを拾うのを、私は窓から目撃した。急いでいる証拠だ。とおりいっぺんの取材のためなら、クラブから税関まで歩いたところでそう遠い距離ではない。続いてS社のT氏がクラブを出る。T氏もまたタクシーを呼びとめて後を追った。10時半。F氏とT氏、肩を並べて戻ってくる。早速「なにかあった?」と声がかかる。「残念ながらお呼びではなかった。いやね、Fさんがタクシーで走ったものだから、こいつはくさいと思ってオレも追っかけたんだけど、見事にカラ振りさ」T氏は、ニヤニヤ笑っている。11時。海運記者の面々は、再び5管へ出向く。炎上した貨物船の乗船員10人は、全員救助されたとのこと。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

神戸港の機能を支えている原動力——それは何だろうP社のN氏は、言下に「港湾労務者だ」と答える。「しかし」とN氏はつづける。「その生活はずいぶん悲惨でしてね」そういって、N氏はこんな話をしてくれた。

ある年の正月のことだった。接岸中のハシケの中で女の死体が見つかった。水上署の調べでは、女はタオルで首を絞められて死んでいた。十九歳の犯人は、三日後に逮捕された。被害者は、神戸港の付近で通行人の袖をひく売春婦だった。しかし、この殺人事件には、たんに一売春婦の死として片づけることのできない、港湾労務者の暗い現実の生活が隠されていたのである。殺された女には、港湾労務者の夫があった。夫は刑務所にはいっていた。仲間と共謀して、岸壁にウズ高く積まれていた荷クズを、トラックに積みこんで盗み出そうとしたのである。ちょっとした金儲けをたくらんだのが、まちがいの



整然と並べられたハシケだが、ここにも悲劇の芽はひそんでいる

もとになった。懲役刑をうけた。困ったのは家族たちである。働き手を失ったことで、路頭に迷う怖れがあった。やむをえず細君が夜の町に出た。それがいちばん手っとりばやい稼ぎの道であった。他に暮しをたてて ゆく才覚が彼女にはなかった。結果は、とり返しのつかない悲劇になった。「こういう事件にぶつかるのは、とてもつらい。だけど、港湾労務者の生活には、こんな悲劇のおこる危険性がつねにひそんでいるんですよ」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「戦後は終ったなんていわれるでしょう。でも、あれはウソだと思うな。例えばね、沖縄と神戸を往復する船があるでしょ。その中に、いわゆる〝カツギ屋〟と称される連中が乗っていましてね。コーヒー・紅茶・タバコなんかを内地で売りさばくためにやってくるわけですよ。それで、いつだったか関税法違反でつかまった人がいた。四十くらいの男でした。事情をきいてみると、子供が米軍のジープにひかれて重傷を負ったという。ところが、どこからも治療費の保証をしてもらえない。その治療費をかせぐためにカツギ屋商売を始めたというわけです。たいしたもうけにはならないんですがね。まあ、ぼくら沖縄の実情はよく知らないけれど、よほど荒廃してるんじゃないかと思いますね。完全にアメリカの軍事基地になってるわけだから。日本にかかわりのないこととして傍観するわけにはいかないと思う。少くとも政治家は、こういう話を、しっかりと胸にたたきこんでおいてもらいたいですね。沖縄の戦後そのままが、沖縄航路をつうじて神戸にはこばれてくる、戦後の終焉なんて説はだから幻想にすぎませんよ。僕なんか、そういうことで今でも《戦争》の匂いを、時々かがされているわけです。だからたとえば、アメリカの第七艦隊が入港してきた時などは、いくらあちらのキャプテンが日米親善に尽したいなんて巧いことを言っても、なんとも白々しい感じなんですよ。やはり、この船は神戸に立ち寄ったあと、例えば南ヴェトナムの戦場におもむくのだということをどうしても考えますよね。日米親善なんて呑気な話ではないと思う。もっとも表面的には、新聞記者といえども、歓迎の意をあらわしておかなくてはならない。白々しい気分になるのもあたりまえでしょう。毎日千隻以上の船が神戸に入って来ますけど、全部が全部ウエルカムというわけにはいかないんですよ。

もっとも、ひょんなことから知り合いになったオランダの船員がいましてね。時々手紙がくるんだけれども、今度会ったら一杯やろうなんて書いてある。こんな気楽な話ばかりだといいんですがねえ。」

以上はC社のW氏の話である。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

ここに書き切れなかった話も、実はたくさんある。海運記者達の目に写る海や港の実態は、ほんとうはまだまだ多様な問題と光景を含んでいるようである。

ともあれ港は、多彩な人間ドラマの舞台だ。そこで織りなされるドラマの数々を、海運記者達は、東洋一の充実を誇る海運記者クラブを城にして、さまざまの感慨を味わいながらみつめ、書きつづけている。

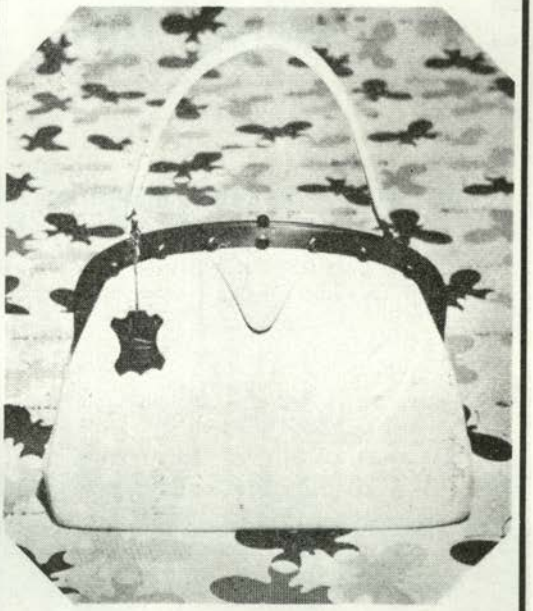
観光船の入港に、春の訪れを感じ、人命を海のクズと化す船の衝突に、激しい怒りをおぼえ、たどたどしい英語で外国船員と便りを交換し、あるいはまたメリケン波止場で愛を告げあう若い恋人たちに、ふと人生の息吹きを見出し、重々しい姿で停泊する軍艦に、血なまぐさい《いくさ》の匂いを嗅ぎ、麻薬の密輸に、神戸に暗躍する暴力団の黒い手を見出し、こうして、海運記者たちは、一年三百六十五日を、港と海の周辺を歩きつづけているのである。

※筆者附記

取材にあたっていろいろとご協力いただいた海運記者クラブのみなさんに、ふかく感謝いたします。

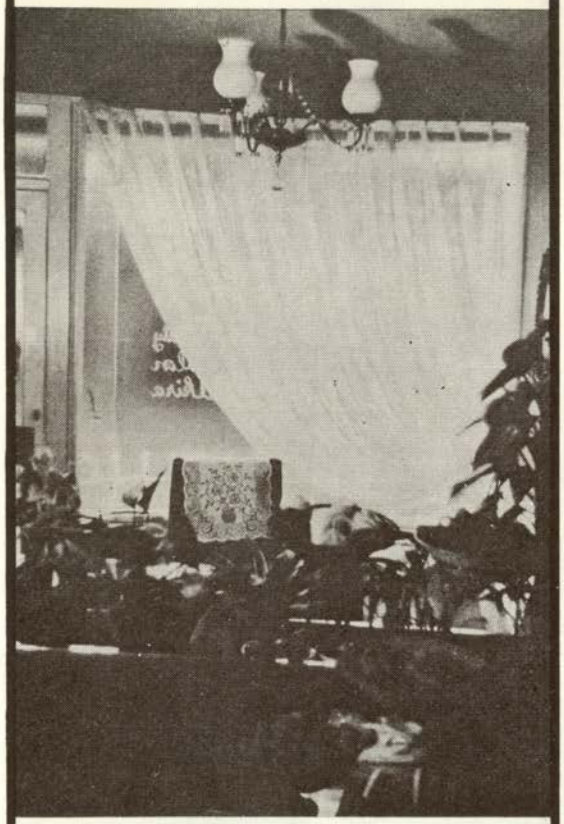
美しさを創る…
アスター・ニュートン
トア・ロード㉝1818

装いの美しいアクセント



特　選
ハンドバック
専門の店
ジラサ
元町2　㉝0813

Akira Beauty Shop



美容室 あきら 西野 明

電話予約制

三宮本通り TEL㉝4461・6458

夏の陽にクールな帽子

婦人帽子

マキシン

神戸・トアロード 東京・銀座3－2

TEL㉝6711～3 TEL(535) 5041